
死んで花咲く勇者かな

楊二郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んで花咲く勇者かな

【Nコード】

N7859Y

【作者名】

楊二郎

【あらすじ】

のび太的存在としてご町内でも有名な『僕』は、いじめっことの決闘中、打ちどころが悪くそのまま死んでしまう。だが、偶然にも蘇生した『僕』は、気づかぬままに召喚された異世界で、勇者に祭り上げられてしまう。そして、そんな映画版の『僕』を底上げする為に用意されていたのは、世界の「バグ」を利用したとんでもないLVUPシステムだったのである。

序

トン。

「えっ？」

突然の、浮遊感。

僕は、宙ちゅうに浮いていた。

それは世界にとっては一瞬のことだったけれど、僕にとってはとても長くて…、

周りに広がる、色のない山々も、

僕を囲んでいた山賊達の驚いた顔も、

僕を崖から突き落とした、その人の姿も、目にしっかりと焼き付いてしまつて。

胸でつかつ。

その異常に隆起したおっぱいをガン見しながら、

僕の体は、自由落下を始めた。

「。。。」

そこからは、よく覚えていない。

僕は落下の恐怖で、気を失ってしまったらしい。

そして当たり前だけど、

崖の下に落ちて、

死んだ。

それが、異世界召喚された、一日目のことである。

0 目 目

中学3年、卒業式。

気の早い桜が咲き始めた、3月10日。

僕は大の字に倒されていた。

「うつ……」

ほほが、痛い。

頭がふらふらする。

僕の頭は、ちゃんとついているのか…？

「てめえ、火野^{ひの}…」

凄みのある声が遠くから、落ちてくる。

立つんだ

「うつ、くつ……」

サボろうとする体を持ち上げて、僕は立ちあがる。

対峙する先には、茶髪の大柄な同級生。

たった今、僕を殴り飛ばした相手。

僕を『いじめ』の対象としてきた、不良^{ふりやう}だ。

「野火^{のび}の癖に俺に逆らおうなんて、生意気なんだよ。」

いつものように、威圧的に僕を睨みながら、そいつはやってくる。

いつもの僕ならここで目をつぶって、

嵐が過ぎ去るのを黙って、耐えるだけだった。

それは昨日までの僕。

目をそらしちゃ、だめだ。

僕は大丈夫だって、

僕は一人でも大丈夫だって、

それを、証明するために僕は、ここにいる。

青い僕の猫に、それを示すために。

「高田^{たかだ}…、たかだー！ー！！」

叫ぶ。

目を、開くんだ。

僕は、お前には負けないって。

「…うるせえ。」

ズンっ。

「うつ…、つぶっ…」

腹を、突き上げられる。

「…てめえは俺のパシリなんだよ。これからもな。」

支配の主張。

僕の答えは…。

「……だっ」

「…あん？」

コンッ。

僕の拳が、高田の肩に当たる。

「……いやだ。」

「…てめえ。」

その後は、ひどかった。

こんなに殴られたのは、初めてで。

痛くて、痛くて、痛くて、痛くて…

でも、胸の真ん中は涼しくて。

「なんで、笑ってやがる。」

だって、僕はすでに、勝っているんだ。

卒業式の後、校舎裏にいじめっことを呼び出して、『いやだ』と主張できた。

だから、他の人がなんと言おうと、

この決闘は、僕の勝ちなんだ。

「ふっ、へっ、ぶっへ、ぐぶっへ……。」

ホントは大声で笑いたいのに、肺が痛くて、へんな笑い声になる。

ゴッ。

「……あっ。」

今度こそ、僕の頭が、飛んでしまった。

それを追うするように体が、ゴロゴロと転がり、視界が灰色になる。

「……!……!……!……!」

どこかで誰かの叫び声。

体が、冷たい。

おかしいな、さっきまであんなに熱かったのに。

それに、ひどく眠い……。

ああ、寝てしまえば楽なんだろうか……。

どうせ明日から、『あの人』はいないんだから……。

違う。

違うんだ。

僕は『あの人』がいないから、強くなろうと……。

ここで逝っては……。

だれが……。

「!？」

突然、視界に色が戻る。

その色は……、金色!?

「あつ……、えっ？」

僕の胸の上に、金色の球が浮いている。

そして球の中心には、僕のお守りが、クルクルと回っている。

「……これ。」

手を伸ばそうとしたけど、体はすこしも動かない。

やがて、その金色の球は大きくなり…、

「火野—————!!」

僕は光に飲み込まれた。

……………。

「おい、%%\$&mp;)」。

「なんだ、<+^、^+?」。

「こつちにまた異物が流れ込んだぞ。」

「そうか。だが人間がやったことだ、私は関与せん。」

「またそれか。お前が作ったものの責任くらい、取ったらどうだ。」

「そう、うるさいことを言うな。\$>@おこつてやるから。」

「ちつ。じゃあ、それで手を打っておくか。」

「しかし、どうも中間点に死体が残ったようだな。」

「…世界横断中に死ぬなんて、器用な奴だな。」

「そつちに飛ばしとくぞ。」

「なっ、ちよつとまで。」

「飛ばした。」

「おい！なに勝手にこつちに押しつけてんだよ。」

「魂もそつちにあるんだ、これが自然だろう。…おやつ、きれいに入った。」

「うお、マジか。…きれいに魂と重なってやがる。ありゃあ、生き

返ったな。』

『ふう。では、そういうことでよろしく。』

『おい。\$>@はどうした。』

『くっ、覚えていたか。しょうがない、いつものところでよいかな？』

『ああ、いいぜ。』

.....。

てってててつ、てんて〜ん

火野 壮太はレベルがあがった！

火野 壮太のちからが9あがった！

火野 壮太のたいりよくが5あがった！

火野 壮太のすばやさが4あがった！

火野 壮太のさいだいHPが25あがった！

火野 壮太は「ふあいあぼると」をおぼえた！

1日目 その1

15才。男。

3月3日の早生まれ。

身長は163cm。

家族構成は、両親と猫一匹。

クラスは、「元いじめられっこ」。

今年の4月から、ちよつと遠い私立の高校に入学して、
そこで友達を作って、部活をやって、それで…

ヒュウ。

冷たい風になでられて、体がブルッと震える。

「んっ、くっ…。」

開いた視界。

いっばいに、人の顔があった。

「うっ、わっ！」

「わっ！」

僕の上げた驚きの声に驚いたのか、人の顔が遠ざかる。
その人は、見たことのないお爺さんだった。

「えっ、あれ…？」

どこだろうっ…、ここは。

小屋だ。

木で作られた小さな、教室の半分ほどの小屋である。

でも、壁も屋根もぼろぼろで、開いた隙間をとる風が、ヒュウヒュウと音を立てている。

テレビで見た、時代劇にでてくる農民の家。

それも、代官にいじめられている貧乏な人達の家のような。

「たっ、たたたたっ…。」

「？」

さきほど僕を覗き込んでいたお爺さんが、なぜかカタカタと震えている。

そういえば、お爺さんが着ている服も、時代劇にできそうな服だ。

「大変じゃーーーーー!!」

「いーーーー?？」

突然叫び声をあげたお爺さんが、カタカタと這うように小屋の外に駆けていく。

「。。。」

体に目を落とす。

転がって汚れた、中学の制服。

卒業生の証としてつけられた胸の造花は、見るも無残に散っている。

「いや、それはどうでもよくて…」

問題は、体が痛くないってこと。

制服の袖を、めくる。

「あれ…。」

そこにあるはずのアザが、ない。

どこにもない。

首も痛くない。

頭をおもいつきり蹴られたはずなのに。

逆に、体が軽いくらい。

「……………」

よくわからない。

ザッ、ザッ、ザッ…。

頭の上にハテナマークを浮かべていると、小屋のそこから
サンダルをすべらせて歩く時のような音が複数、近づいてくる。

ザッ。

音は小屋の前で止まり、

「失礼いたします。」

そして、お爺さんが一人、小屋にはいつてくる。

続いて、お婆さんが一人。

次にお爺さんが一人。

そして、お爺さんが一人。

さらに、お爺さんが一人。

また、お婆さんが一人。

お爺さんが一人。

お爺さんが一人。

お爺さんが一人。

……。

大量のお爺さんお婆さんで、小屋はいっぱいになった。
とても、狭い。

僕を中心に、ずらりと並ぶ老人達。
そこで自分が、小屋の中では一段高い、台座の上に倒れていたことに気づいた。

「えーと……。」「

バサッササササササ……。

老人たちが一斉に、床に座り込む。

いや、えつと……。土下座してる。

「あの、えつと……。」「

「ひうしゃしゃま!」「

『勇者様!』

突然、老人達が声をあげる。

「ひっ!」「

卒業式の送辞のような、見事なはもりっぷり。

「よくじよ…、わしらの召喚にに応じてくださいました。」
僕の真下のお爺さんが顔を上げて、僕を見ている。

「しょ、召喚？」

僕もそのお爺さんに、視線を合わせる。

「ふあい。」

歯がないのか、聞き取りにくい。

「召喚つて…、あの別次元から強いモンスターを呼び出…」

「しゃっそくで申し訳ないでしゅが、もうじゅかんがありません。」

「えっ？時間がない？」

「ちようばつして来てくだしやい。」

「ちょ…？ちようばつ？」

「長老は、『降臨くださって早々に申し訳ないのですが、もはや我らには時間が残されておりません。どうか速やかな討伐とくはつをお願いいたします』、といっております、勇者様」

「あつ…、どうも。」

お爺さんの横のお婆さんが、フォローしてくれる。

「というか…、討伐？」

勇者、召喚、討伐。

何かどこかで聞き覚えのある単語のような…。

「はははっ、まさか大魔王を倒せとか、そんな話じゃないですよね？」

「じゃい、まおう？」

「大魔王？とっています。」

「ははははつ。いや、今は聞かなかったことにし…。」

「しょうじゃ！」

土下座している老人群のどこからか、声があがる。

「やつらは悪魔じゃ！魔物じゃ！」

「青い血がながれちよる！間違いない！」
てんでに叫び出す、ご老人達。

「…静かにしないかい！！」

さつきフオローしてくれたお婆さんが顔を上げ、老人達を一喝する。

「……………」

それだけで老人達の騒ぎが、収まる。

「…失礼しました、…勇者…様？」

「あ、はい。ごめんなさい。」

叫び声に反射して、頭を抱えた防御態勢に入ってしまった。
沁みついた習慣が、憎い。

「それで、その…つまり？」

「つまり…。」

「裏山の山賊を、倒してください。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7859y/>

死んで花咲く勇者かな

2011年11月23日20時45分発行